

年 組 番
(名前)

<新聞記事から考えよう> 171029



ハロウィーン



日本でもハロウィーンを仮装・コスプレのイベントとして楽しむ人が増えてきました。ハロウィーンは元々日本の行事ではありません。どんな行事なのか調べてみましょう。

(記事はすべて佐賀新聞 2017年 10月 29日付)



華やかに

メキシコ市で骸骨に仮装する人々。死者をとむらう記念日の一環だそうです。服装もバッチリ決まっています (AP=共同)

「おもてなししないと私たちは悪霊となつて人間に襲いかかる」という警句が含まれる。仮装の子どもたちは、比喩ではなく本当の死者なのである(鶴岡真弓著『ケルト 再生の思想』) ◆それを19世紀、アイルランドなどからの移民が米国に広めた。ハロウィーンに欠かせないのがカボチャ。エッセイストでタレントの阿川佐和子さんは米国へ行った際、ハロウィーンパーティーで魔法使いに仮装した思い出を随筆に綴っている ◆目の前に並んだカボチャを見て「身はどうするんだろう」と思っていたら、焼きたてのパンケーキパイが登場。思わず「これが本場か」と感激した。本番は31日だが、きょうあたり子どもたちの大きな掛け声が聞こえてくるかもしれない。(章)

有明抄

今年もハロウィーンの季節がやってきた。街中の飾り付けが、カボチャのお化けやランタンに変わり知らせてくれる。その起源は、スコットランドやアイルランドに住んでいた古代ケルト人による「サウィーン(万霊節)」にたどりつく ◆ケルト暦で正月は11月1日。1年が閉じる前夜、祖先の霊や親しかった死者を家に招き入れて、もてなし、静かに供養する。サウィーンは、日本の大みそかとお盆を合わせたような行事といえはいいだろうか ◆子どもたちが家々を回って「お菓子をくれなさい、いたずらするぞ」と言うのは、「おもてなししないと私たちは悪霊となつて人間に襲いかかる」という警句が含まれる。仮装の子どもたちは、比喩ではなく本当の死者なのである(鶴岡真弓著『ケルト 再生の思想』) ◆それを19世紀、アイルランドなどからの移民が米国に広めた。ハロウィーンに欠かせないのがカボチャ。エッセイストでタレントの阿川佐和子さんは米国へ行った際、ハロウィーンパーティーで魔法使いに仮装した思い出を随筆に綴っている ◆目の前に並んだカボチャを見て「身はどうするんだろう」と思っていたら、焼きたてのパンケーキパイが登場。思わず「これが本場か」と感激した。本番は31日だが、きょうあたり子どもたちの大きな掛け声が聞こえてくるかもしれない。(章)

○ハロウィーンの起源は

○どんな意味のある行事なのか

○なぜ仮装をするのか

○仮装の他にどんなことをするのか